

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-6

「裸婦像の件、協力していただけるそうだ。君からもお礼を言っておいてくれ」

いろいろと策を弄したことが功を奏しているにもかかわらず、朝倉は空喜びになるのが怖くて、わざと拍子抜けしたように言った。

いつ頼んだのか、ウェイターがジントニックを横田にサーブした。

「この人が、裸婦像を個展の目玉にすると聞いて聞かないのだ」と横田は嘯いた。

「同意なさったのでしょうか？」

画家の落ちぶれた風体を、気持ちのどこかで期待していた真紀は、それがものの見事に裏切られた所為もあって、自嘲の笑みをもらして訊ねた。

「どうもこうもないさ。知っての通りだよ」

と横田は答えてから、グラスの中のライムをマドラーで潰して攪拌した。

「落ちぶれた、落ちぶれたと聞かされて、もう少しで信じてしまうところでした。ねえ、朝倉さん！」

真紀は横田を見ないようにして、朝倉に精一杯の皮肉を込めて言った。

まんまと朝倉の術中にはまってしまった真紀ではあったが、正直なところ、悔しさよりも、どこにも逃げ場のない滑稽さのほうに勝っていた。

それでも真紀は、無感動な顔でジントニックをかたむける横田を意識しないわけにはいかなかった。

「朝倉さん、ご要望通りにいたしますが、一つだけ条件があります」

「なんでしょうか？」

朝倉は不安げに、横田と真紀を見比べながら聞き返した。

「裸婦像の存在を知っているのは、私たちだけですか？」

朝倉は問いかけに、沈黙で否定する。

「そうですね。パソコンに取り込んでいるくらいですから」

真紀は相手の想定内の反応を確かめるように言った。

横田と真紀のスキャンダルがメディアに曝された時、特化した恰好の餌食になったに違いない裸婦像を極秘裏にしておくことができたのは、愛憎劇の渦中であっても、男と女と言うよりは、画家とモデルとしての結実した作品の力が有無を言わせず働いたからに他ならなかった。

この先、裸婦像の存在が知られることになったとしても、絵画の価値が上がることはあっても下がることはないことを三人とも先見していた。